

宗教とはなにか

“（瓶の酢を味見し）孔子は酸っぱい、釈迦は苦い、老子は甘い、と言った（三聖吸酸）”

「人間はパンのみにて生きるにあらず、神の口から出る1つ1つの言葉による」。宗教は、リモデリング以外の生きる目的を人間（ヒト）に与えてきました。宗教には大きく2つの役割があると考えられます。1つは、精神の安定化装置（スタビライザー）としての役割であり、もう1つは、社会の安定化装置としての役割です。それぞれの役割について考えてみましょう。

精神の安定化装置は、ほとんどの宗教がその創設期に意図したであろう、本来的な役割です（注1）。肥大化した前頭葉（脳）は、感情・欲望の拡大再生産装置＝増幅器（アンプ）であり、喜びや悲しみなどのプラス・マイナスの感情は、揺れ動き、高揚しやすいものです。しかも、生活のほとんどが好ましいプラス要因で満たされていて、1つでも心配事があると、我々の気分や感情はそのことに捕らわれてしまい、全体としてマイナス基調になりがちです（シューペン・ハウエル）。良い気分というのは、おおむね心配事の無い状態です。感情・気分の針は、マイナス優先にできてしまっているのです。そのため、釈迦が言ったように、我々の生活・人生は、生きることも、老いることも、病むことも、死ぬことも、苦悩で満ちている、ということになってしまいます。宗教の本来的な役割は、このような、マイナス優先思考、苦悩、際限のない欲望などの悪循環から人間（ヒト）を救済し、精神の安定化装置として機能することなのです。宗教は、その役割を教義への信仰という形で実現しようとします。信仰とは、前頭葉（脳）を他者に全権委任する、と言い換えることもできます。精神の安定を手に入れることと引き換えに、自分で論理的に思考することを放棄して、前頭葉（脳）丸ごと偉大なもの（神）へ全権委任してしまうのです。一步、一步、自然からスタートして、人間とは何かを自力で考察しても、人生の重みに耐えかねて、宗教へ全権委任することを選択すれば、ロジック（論理）や、メカニズム（仕組み）は、神話の前に屈し、水泡に帰します。一気に卓袱台をひっくり返してしまうようなものです。しかし、苦悩が大きいほど、真剣に信仰に取り組む人ほど、宗教の救済効果が絶大であることは事実です。ニュートンやパスカルなどの優秀な科学者ですら、敬虔なキリスト信者でありました。万有引力というメカニズム・法則を発見しても、何故そのようなメカニズムが生じたか、という最後の1点において、科学も宗教の軍門に下ることになったのです。

宗教のもう1つの側面、社会の安定化装置としての役割は、言葉は悪いですが、社会が滞りなく上手く機能するように、人間（ヒト）を文明の中で飼いならすための手段と言えます。そのため社会の頂点に君臨する為政者が、人心掌握のため教育の中に取り入れるなど利用してきました。ほとんどの宗教は、もともとは精神の救済が第一義的でありましたが、前頭葉の全面委任的特徴を活用すれば、同じ信仰を持つ人々を精神面で一網打尽に掌握することが容易であるため、次第に為政者に社会の安定化装置として利用されるようになったのでありましょう。政治と宗教は、お互いに利用し、利用されながら、その勢力範囲を拡大しようとしたのです。第2次大戦中の神風特攻隊を生み出した日本の集団信仰（注2）、聖戦（ジハード）の名のもとに自爆テロに走るイスラム過激組織、聖地奪回を旗頭に長きにわたり派兵を繰り返した十字軍の遠征などなど、使い方を誤れば、教祖や為政者が、信仰を盾に、信者を戦争へと駆り立て、信者の命までもコントロール出来てしまう危険性を証明しています。

キリスト教、ユダヤ教、イスラム教など、宗教の纏う全権委任的傾向は、欧米・中東など、2元論的な砂漠の文明においてより顕著です。神と悪魔、善と悪、人間と自然、有と無、など白黒をはっきりと区別し、人間を特別なものとして創り出した善なるもの神に全権を委ねる、という考えが、適合しやすい文化的・歴史的土壌があったと言えるでしょう。人間にとっての翼である前頭葉を全権委任してしまうのですから、それを委ねられる神は、人間はもちろん自然をも超越した絶対唯一の存在でなくてはなりません。そのためこれらの欧米型宗教は、

必然的に排他的となり、他宗教・別神を認めないことになります。アメリカ人の友人であるクリスチャンは、無宗教な私には正直迷惑なほどに、キリスト教への改宗・帰依を執拗なほどの熱心さで勧めてくれます。邪心や打算は全くなく、信仰が魂を救済してくれる、友人も同様に救済されるべきだと、心から願っております。その純粹さゆえに、あなたはあなたの宗教を信仰すればよいですよ、とは簡単にはならないのでしょうか。

仏教、道教、儒教など、アジア系の宗教は、多元論的な森の文明において誕生し、広く受け入れられてきたこともあり、他宗教に対する排他的傾向はかなり弱められています。釈迦、莊子（あるいは老子）、孔子（あるいは孟子）など、教義を説くカリスマ的な教祖は存在しますが、唯一神という絶対的価値観を持ち出すことはなく、見方や見る人によって善悪などの評価は変わる相対的価値観を説いています。為政者の治国と人民の精神的飼いならしを第一義的に考案された儒教を除けば、仏教、道教は、精神の安定、苦悩からの脱却という目の前の課題解決をその第一義的な目的にしています。神か悪魔か、信じるか信じないかと、2元論的に前頭葉（脳）の全権委任を迫ることがないことも、アジア系宗教の特徴であり（注3）、中国や日本に無宗教の人の割合が高いのも当然と言えるかもしれません。欧米がアジアの植民地化に乗り出した18世紀以降、宣教師によりキリスト教への改宗を試みたが、なかなかうまくいかなかったのも、このような文化的・歴史的土壌の違いがあると思われまます。

欧米系の宗教、アジア系の宗教、その可否や、得失を論ずるつもりは毛頭ありません。また、宗教の強力な救済機能を否定するつもりも全くありません。信じたい人は、信じて救われるべきだと思います。異なる宗教に共通して言えるのは、精神および社会の安定化装置として強力なツールではありますが、その反面、ヒトを人間たらしめている前頭葉（脳）を全権委任してしまう重大なリスクも内包しているという事実であり、我々はこの点を肝に銘じておく必要があることを強調、確認しておきたかったです。

（注1） 儒教は、精神の安定化装置としてよりも、国を如何に治めるかかという視点から、賢人（歴史に精通した知識人）が為政者や人民のために意図して構築された宗教です。

（注2） 第2次大戦における日本の宗教は、靖国神社や天皇崇拝に代表される神道と考えられがちですが、人民の精神コントロールを行っていたものは、大衆の目、周囲の目、といった日本独特の集団第一主義です。集団圧力は、現代の日本でも色濃く生き残っているのです。

（注3） どうしたら苦悩から脱却できるかという純粋な問いから出発した釈迦の原始仏教も時代とともに変容しました。例えば、日本における鎌倉仏教では、「ただ念仏を唱えれば救われる」「悪人こそ救われる」など、前頭葉の全権委任的傾向を強め、それと歩調を同じくして、仏教が政治利用されていったのです。